

「佐賀の昔話」について

佐賀民話の会 事務局長 小副川肇

はじめに

最初に、私事ですが、この「Web版佐賀の昔話」の企画は、平成24年度に佐賀県立図書館が、当時、県内における昔話研究の第一人者であった故宮地武彦先生のサポートを得て始まったと聞いております。先生の体調がすぐれなかったことなどもあり、2年目より筆者（小副川）が引き継ぎましたが、宮地先生は、100話の完成を見ずして平成26年3月に他界されました。

完成を機に、ここに、改めて、ご冥福をお祈りしたいと思います。

さて、「Web版佐賀の昔話」は、これから佐賀で育っていく子供達に、インターネット動画で郷土の昔話に親んでもらうことを目的として企画されました。

それと同時に、佐賀県で育ち今は県外で過ごされている人達にも、故郷を思い出すきっかけになればという思いや、佐賀県が九州のどこにあるか知らないという人達に、少しでも佐賀を知るきっかけにしてもらえればとの期待もあったと聞いています。

実は、このサイトのトップページにも書いてありますが、佐賀県内には、まだ県民に知られていない昔話がたくさんあります。採集されてはいるが、テープからの聞き取りがなされず記録されていないものまで含めると、1万話を超える話が採集されているのではないかと思います。筆者は、佐賀は九州で一番人口が少ない県ですが、昔話の採集数ではトップクラスだと思っています。

この企画で取り上げた100話を見てもらえばわかりますが、佐賀の昔話は実に豊かです。北は玄海町の「鯛の嫁さんと味噌汁（鯛女房）」(No. 56) から南の鹿島市の「ミソゴロドンの有明海干拓（巨人伝説）」(No. 90)、東は基山町の「わくど息子」(No. 100) から西は有田町の「絵描き座話（一杯飲まんば話されん）」(No. 12) まで、多種多様な話でいっぱいです。

私がこの企画のサポートを引き継ぐに当たって気を付けたことは、次の点です。

1) 佐賀らしい話をできるだけ選ぶこと

インターネットで全世界の人に見てもらうのだから、できるだけ佐賀らしい昔話を選ぼうと考え、伝説についても、ストーリー性があり伝承者等が確認できるものは、多少話の豊かさは犠牲にしても積極的に

取り上げたほか、地域に根付いて伝承されてきた「勘右衛門話」(唐津)や「横道孫兵衛話」(吉野ヶ里町)などのおどけ者の話もできるだけ取り上げました。

また、動物昔話、本格昔話については、全国どこにでもある話が多いことから、その中でも佐賀の年中行事や習俗などの由来に結び付いているものがあれば、優先的に取り上げることにしました。

2) 本格的な語り手の話をできるだけ選ぶこと

せっかく日本有数の本格的な語り手が佐賀におられるのだから、できるだけこの語り手の本格的な昔話を味わってもらおうと考え、佐賀の本格的な語り手が持つ話の中で、上記①に該当するものがあれば優先的にとりあげることになりました。ただし、話が特定の語り手ばかりに偏らないようにも気を付けたつもりです。

3) 同じ話はできるだけ避けること

県内でよく聞かれる話は数が多いので、その中から、4)の地域的バランスも考慮して、話が豊かであるものや地域的な特性を持っているものを優先して選定しました。

4) 地域的なバランスをできるだけ考慮すること

県内の4地区において、できるだけ取り上げる話数が偏らないように、採集話数や語り手の有無を考慮して選定しました。この点は、1)から3)の条件を踏まえた上でなので、特に苦慮しました。

5) 採集されてはいるが記録に残されていない話もできるだけ取り上げること

県内くまなく採集が実施されていると言っても、ばらつきはあります。また、昔話が採集されていても記録化されていないものも多数あります。

このため、こうした記録化がなされていない話であっても、上記1)～4)に該当する話があれば、採集時の音源から聞き取ることにしました。その際、佐賀県立図書館が平成25年度に実施した「口承文芸デジタルアーカイブス整備事業」により記録されたデータを利用させていただきました。

このため、刊行されていない資料も多数取り上げることになりましたが、結果的には、未公開資料の公開にもつながり、学術的にも良かったのではないかと考えています。

この解説のページでは、佐賀の昔話をもっと良く知ってもらうために、佐賀でよく聞かれる話等を対象として、話の特徴や伝承範囲、また、よく聞かれる理由や謎など面白そうな点を中心に解説しました。佐賀の昔話の面白さを少しでもお伝えすることができたら幸いです。

なお、本文中に「○○」(No.○※タイトル一覧の番号)という表現で、本シリーズで掲載した話のうち関係する話の「タイトル名」と「No.」を記載しています。この解説を読んでいただく際、併せて話も参考にいただければ、より面白さが分かるかと思います。

また、昔話の定義や伝説との違いなども解説しておりますので、この解説を読むに当たっての基礎知識にいただければと思います。

1 昔話とは

この企画のタイトルになっています「昔話」や、動画のコメントでよく使っています「話型」等の用語の意味について、専門書を参考に、簡単ですが説明させていただきます。

なお、この企画で取り上げた100話には、昔話の他、伝説も含まれており、その意味では、「佐賀の昔話」という言葉は正確な使い方ではありません。ただし、語り手の感覚から言えば、伝説も昔話も同じであることが多いことから、この使い方もあながち間違いとは言えません。

(1) 昔話と伝説の違い

「日本昔話ハンドブック」(稲田浩二他編、平成13年、三省堂)によると、

- **昔話**→「民間の人々が生活の中で伝えてきたもので、語り手が聞き手に語るという口頭伝承(口承)を基本的な伝承の様式として持つ、一定の型を備えた散文の形式…(中略)…、発端句や結末句(結句)を用いるなどして話の様式性や虚構性を重視する点を特徴とし、伝説や世間話と区別される」
- **伝説**→「民間において口承で伝えられてきた散文形式の物語という点で昔話と共通するが、しばしば具体的な事績や人物と結びついて、歴史的な事実性や共同体における共有制を重視する点を特徴とする」

とされています。

なお、参考までに、都市伝説がそのジャンルに入るとされる「世間話」については、次のように定義されています。

- **世間話**→「民間において口承で伝えられてきた散文形式の物語という点で昔話と共通するが、様式性や虚構性を重視しない点で異なる。また、語り手の身近で起こった出来事として自在に語られる点で伝説と区別される。」

ただし、実際には、明確にこの3区分に分類できる話は少なく、例えば、話に様式性や虚構性があり、豊かな話であっても、具体的な事績や人物と結びついたものであれば、伝説とすることも少なくありません。

例えば、本シリーズの100話中の「杵島山の松の精と三弦弾きの娘」(No.27)は、話そのものは「木魂婿入り」という話型も存在し、典型的な昔話に該当しますが、話の舞台が白石町の杵島山であること、松の木を使用したという馬田橋が実際にあること(今はコンクリート橋に代わっているが)等から、伝説に分類せざるを得ません。

こうした話が、100話中の伝説16話の中に10話見られます(後述の「2 県内における昔話の採集状況」の(2)参照)。

(2) 昔話の話型(タイプ)とは

同じく、「日本昔話ハンドブック」によると、

- **話型**→「昔話を整理する際、基準として用いられる昔話分類の単位。話を構成する1ないし複数の主要なモチーフが一致し、その配列順序も同じ話を同一の話型として認定する」

とされています。

そして、その数は、「日本昔話名彙」(柳田国男監修、昭和23年、日本放送出版協会)では約340話型(話数も340話)、「日本昔話集成 全6巻」(関啓吾著、昭和25~33年、角川書店)では約650話型(同、8,700話)、そして、直近の「日本昔話通観 第28巻(昔話タイプ・インデックス)」(稲田浩二編、昭和63年、同朋舎)では約1,211話型(同、約6万話)とされています。

全国では、その後も調査が続けられており、現時点では、話型の数はもっと多くなっていると思われるが、整理されたものはまだありません。

ちなみに、佐賀県内での話型数も、現時点ではまだ整理されたものはありませんが、県内で一番話を語った語り手の蒲原タツエさんが843種類の話語っていることから、1,000種類は確実に超すと思われます。

なお、動画のコメントの中で「話型群」という用語もたびたび使用していますが、「話型群」とは、同じような話型の集まりを指し、同じく「日本昔話ハンドブック」によると、

- **話型群**→「複数の異なった話型が、主要登場者で共通しており、しかも話の構成や主題が類似している場合、これを話型群あるいは話群と呼ぶ」

とされています。

例えば、本シリーズの「貝の恩返し(貝姫)」(No. 18)は異類婚姻譚(異類聲)という話型群に属しますし、「蕎麦の根の赤い由来(神様の金の鎖)」(No. 55)は「逃鼠譚」という話型群に属します。

2 県内における昔話の採集状況等

県内における昔話の本格的な採集活動は、昭和43年8月の國學院大學説話研究会による県内全域の調査が始まりです。

そして、同調査に同行された故宮地武彦先生は、調査終了後も、奉職された神埼農業高等学校や佐賀東高等学校等の生徒を引き連れて、精力的に県内を回られるとともに、昭和59年には「佐賀民話の会」を立ち上げ、先生の指導の元、同会員も加わった採集活動が更に続けられることとなります。

また、こうした活動の間にも、故松尾テイさんや故蒲原タツエさんなど佐賀県を代表する語り手を次々と発掘されるなど、宮地先生の活動は、平成26年3月23日にお亡くなりになる迄、途切れなく続けました。

その結果、正確な数は掴めていませんが、記録として文字化されていないものまで含めると、現時点で1万を超す昔話が採集できていると思われます。

この結果は全て、宮地先生の活動の賜物であり、宮地先生なくしては成し得なかった成果です。改めて、宮地先生の偉大さを思い起こさずにはおられません。

(1) これまでの主な採集活動等

さて、こうした宮地先生の採集活動等の中から、200話以上の話数があった採集活動をリストアップしました。昔話の原典を捜す際の参考にもなると幸いです。

(語り手からの聞き取りによる個別調査)

1) 故松尾テイさん

→ 昭和59年8月～61年1月にかけて**234話**を聞き取り、「肥前伊万里の昔話と伝説(昔話研究資料叢書別巻)」(昭和61年、宮地武彦著、三弥井書店発行)に集録

2) 故蒲原タツエさん

→ 昭和61年7月～平成元年8月及び平成5年12月～平成10年12月にかけて計**843話**を聞き取り、「蒲原タツエ嬢の語る843話」(平成18年、宮地武彦著、三弥井書店発行)に集録

(老人クラブ等の協力を得て実施した集団調査)

1) 千代田町内(現神埼市)

→ 昭和40年7月25日～26日及び昭和57年7月26日～30日にかけて**297話**を採集、「千代田の民話」(昭和60年、千代田町教育委員会編集・発行)に集録

2) 太良町内(藤津郡)

→ 昭和47年7月25日～8月3日にかけて**253話**を採集、「太良の民話」(平成10年、太良町教育委員会編集・発行)に集録

3) 旧佐賀市内(現佐賀市)

→ 昭和49年6月～51年にかけて**231話**を採集、「さかの民話」及び「さかの伝説・世間話集資料編」(昭和51年、佐賀市教育委員会編集・発行)に収録

4) 諸富町内(現佐賀市)

→ 昭和52年5月～2年間かけ**264話**を採集、「諸富の民話」(昭和54年、佐賀東高等学校郷土

- 研究部編集・発行) に集録
- 5) 川副町内 (現佐賀市)
 - 昭和53年3月までに **294話**を採集、「川副の口承文芸」(昭和53年、川副町誌編纂委員会編集・発行) に集録
 - 6) 嬉野町内 (現嬉野市)
 - 昭和53年12月25日～55年4月6日にかけて **263話**を採集、「嬉野の民話」(平成9年、嬉野町教育委員会編集・発行) に集録
 - 7) 巖木町内 (現唐津市)
 - 昭和54年度に **290話**を採集、「巖木の民話 巖木町文化財調査報告書第3集」(昭和55年、巖木町教育委員会編集・発行) に集録
 - 8) 三日月町内 (現小城市)
 - 昭和58年6月～7月にかけて **352話**を採集、「三日月の民話」(平成3年、佐賀民話の会編集・発行) に集録
 - 9) 牛津町内 (現小城市)
 - 昭和59年7月～8月にかけて **281話**を採集、「牛津の民話」(昭和60年、佐賀民話の会編集・発行) に集録
 - 10) 基山町内 (三養基郡)
 - 昭和59年9月～60年10月にかけて **267話**を採集、「基山の民話」(昭和61年、佐賀民話の会編集・発行) に集録
 - 11) 三根町内 (現三養基郡みやき町)
 - 平成5年3月～4月にかけて **593話**を採集、「三根の民話」(平成8年、佐賀民話の会編集・発行) に集録
 - 12) 富士町内 (現佐賀市)
 - 平成8年～11年にかけて嘉瀬川ダム水没地で **331話**を採集、「嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書—佐賀県佐賀郡富士町—」(平成12年、富士町教育委員会編集・発行) に集録
 - 13) 旧小城町内 (現小城市)
 - 平成13年4月～15年3月にかけて **433話**を採集、「小城の口承文芸」(平成17年、小城町教育委員会編集・発行) に集録
 - 14) 鳥栖市内
 - 平成14年2月～6月にかけて過去の調査も含め **1001話**を採集、「とすの口承文芸」(平成20年、鳥栖市誌編纂委員会編集・発行) に集録

ごらんのように、上記掲載話の合計6,237話に、採集話数200未満の地区、また調査は実施しているものの記録化がまだの地区の採集数を含めると、県内全体の採集数が1万を超えたとする推測も、あながち大げさとは言えないと思います。

なお、このように見ていくと、県内で未採集地区はほとんど残っていないように思われますが、筆者の手元の資料で見る限り、次の地区が未調査地として残っています。既に遅いかもしれませんが、早急な採集活動が望まれます。

(昔話採集未実施地区)

- 1) 旧北茂安町 (現みやき町)、2) 旧佐賀市西部 (嘉瀬町、鍋島町等)、3) 江北町 (杵島郡)、4) 大町町 (杵島郡)、5) 福富町 (現杵島郡白石町)、6) 武雄市 (北方町、西川登町矢筈・神六を除く全域)、7) 旧唐津市内全域、8) 旧北波多町 (現唐津市)

(2) 本シリーズ掲載話 (100 話) の分類

- 本シリーズに掲載した 100 話を昔話、伝説に分け、さらに、昔話は、本格、笑、動物別に分けて分類した件数を表にしてみました。

県内で伝承されている話の地区別、あるいは種類別の特徴が、この表でもある程度は出ていると思いますので、「3 県内で伝承されている昔話の特徴」を読む際の参考にしてもらえればと思います。

地区名	掲載話数	昔話				伝説	備考 (特徴等)
		動物	本格	笑	計		
三神	20	5	6	6	17	3	・種類別の話のバランスが取れている。 ・おどけ者として、横道孫兵衛話 (吉野ヶ里町) が存在
佐城	28 (2)	7	12	4	23	5	・記録化された採集話数が最も多い ・藤津地区の蒲原さん程ではないが、10~100 話以下の語り手が多数存在 ・「柿むき話」(佐賀市大和町松梅地区) 等の地域性がある話の存在
藤津	21 (2)	0	11	3	14	7	・本格的語り手として、蒲原タツエさん (21 話中 15 話) が存在 ・伝説は杵島山麓に集中 (7 話中 5 話) ・おどけ者として、善右衛門話 (太良町)、久惣十話 (嬉野市) が存在
杵西	17 (0)	3	8	5	16	1	・本格的語り手として、松尾テイさん (17 話中 11 話) の存在 ・有田焼を作る過程で話された「絵描き座話」(有田町) の存在
東松浦	14 (1)	1	2	8	11	3	・記録化された採集資料が少ない ・笑話は、佐賀県の代表的おどけ者である勘右衛門話の存在
計	100 (5)	16	40	26	82	18	

(注) 区分が難しい話は、筆者の基準より分類した。掲載話数欄の () 内の数値は、昔話、伝説のどちらにも取れる場合で、伝説に区分した話の数である。(詳しくは、前述 1(1) の「ただし…」以下及び次項の「エ伝説」参照)

- 上記表で分類した昔話 (動物、本格、笑)、伝説の説明 (定義) と、本シリーズに掲載した 100 話のうちから各分類に該当する話の主なタイトル名を取り出してみました。

昔話、伝説等の分類から、見たい話を捜す際の参考になると思います。

ア 動物昔話

主に動物や植物が登場する話で、更に、次のように区分できます。

- 1) 形態や習性の由来を主な内容とする話→「蛙の親不孝」(No.19)、「雀と燕と蛇と蛙」(No.50)、「豆と石と藁の旅」(No.89) 等
- 2) 動物の社会や動物どうしの葛藤を主な内容とする話→「兎と猿と狸」(No.6)、「兎の仇討ち(カチカチ山)」(No.7)、「猿どんと蟹どん」(No.38)、「猿の生き胆」(No.39)、「鼠と狐の競争」(No.71) 等

イ 本格昔話

本格昔話を更に話型群別に分類し、本シリーズに掲載した話の中から該当するものを取り上げると、次のようになります。

本格昔話については、これまで明確な定義付けがなされたものはありませんので、とりあえず「日本昔話大成 11巻」(昭和59年、関敬吾、野村純一、大島廣志編、角川書店発行)において本格昔話とされているものを参考に分類しました。

形式的には、本格昔話は起承転結のストーリーをもった虚構の物語と考えられますが、実際には、この他、動物昔話や笑話に分類されないものも本格昔話として分類されています。また、伝説と結合しているものもかなりあります。

- 1) 異類婚姻譚(異類との婚姻を主なテーマとしている話。古い時代の名残をとどめているものもあります。)→「明け六つ暮れ六つの鐘(蛇女房)」(No.1)、「貝の恩返し(貝姫)」(No.18)、「猿と娘と猫の皮(猿婿入り)」(No.37)、「節分の起源」(No.52)、「七夕さんのはじまり(天女の羽衣)」(No.58)、「月見草の花嫁」(No.59)、「蛤嫁」(No.75)
- 2) 隣の爺譚(良いお爺さんと悪いお爺さんの話)→「ぐうずのものいい」(No.29)、「取付こうか引つ付こうか」(No.62)、「糊地蔵」(No.74)、「ポンポコリンの屁(屁ひり爺)」(No.85)
- 3) 致富譚(徳のある者や知恵のある者が富を得る話)→「和尚さんと宝の化物」(No.15)、「末っ子の焚き物とり(三人兄弟の修行)」(No.49)、「縄ぎれ一本で庄屋の聲(縄ひとすじ)」(No.66)、「寝太郎と鼠(小判の虫干し)」(No.72)
- 4) 継子譚(継子が主人公の話)→「父さん恋しやチンチロリン(継子と尺八)」(No.63)、「継子の歌詠み(皿々山)」(No.88)
- 5) 報恩譚(動物の報恩を主なテーマとしている話)→「猫和尚さん(猫の恩返し)」(No.69)
- 6) 運命譚(運命を主なテーマとしている話)→「産神と河童」(No.11)
- 7) 呪宝譚(霊力を持った呪宝により富を得る話)→「川の神様の贈り物(涎たれ小僧)」(No.23)
- 8) 逃鼠譚(魔物などから逃げる話)→「蕎麦の根の赤い由来(神様の金の鎖)」(No.55)
- 9) 大歳譚(大晦日の不思議なことを主なテーマとする話)→「貧乏神と福の神」(No.80)
- 10) 婚姻譚(婚姻を主なテーマとする話)→「桃売りの声(絵姿女房)」(No.95)
- 11) 異常誕生譚(異常な誕生をした子が幸せになる話)→「わくど息子」(No.100)

ウ 笑話

笑を主なテーマとする話です。主に、知恵のある者の話(おどけ者話等)と愚かな者の話(慌て者話等)

に分かれます。

1) 地域のおどけ者話 (地域にいたとされる人気者の話)

- ・ **勘右衛門話** (唐津にいたとされるおどけ者の話。カンネ話といい、東松浦地区を中心に伝承されている。) → 「借金取りの香典 (勘右衛門話)」 (No.44)、「涙が零れる・泥鰯汁 (勘右衛門話)」 (No.65) など多数
- ・ **横道孫兵衛話** (吉野ヶ里町にいたとされるおどけ者の話。オウドウマゴベエ話といい、吉野ヶ里町を中心に伝承されている。) → 「横道孫兵衛話 (鴨の汁)」 (No.14)
- ・ **善右衛門話** (太良町にいたとされるおどけ者の話。ゼンネン話といい、太良町を中心に伝承されている。) → 「河童と相撲 (善右衛門話)」 (No.20)、「善右衛門話 (鉄砲・鴨千匹)」 (No.54)
- ・ **久惣十話** (嬉野市吉田にいたとされるおどけ者の話。クソジュウ話といい、嬉野市、鹿島市を中心に伝承されている。) → 「材木かつぎ (糞じゅうさん話)」 (No.34)
- ・ **善兵衛話** (どこにいたかは不明なおどけ者の話。ゼンベイ話といい、多久市を中心に伝承されている。) → 「こんにやく問答」 (No.33)、「半馬鹿者の西目行き (善兵衛話)」 (No.76)

2) **屁の話 (屁を笑のテーマにした話)** → 「屁の敵は屁で討つ」 (No.82)、「屁ふり嫁さんの雁落とし」 (No.83)。なお、「ポンポコリンの屁 (屁ひり爺)」 (No.85) は本格昔話に分類。

3) その他

「姥がみとたぬきゅう (何が恐い)」 (No.9)、「絵描き座話 (一杯飲まんば話されん)」 (No.12)、「縁起のとり直し」 (No.9)、「砂糖菓子はお弥陀様 (和尚と小僧)」 (No.35)、「長い名の子」 (No.64)、「こわか侍」 (No.68)、「へへラヘーとホホラホー」 (No.84)、「ヨイショはダンゴ (団子髻)」 (No.97)

エ 伝説

伝説の条件である、いつ、どこで、だれがのうち、地域との結びつきが強い「どこで」を重視し、地域の物や地名に結び付いていて地域に根付いているものは、本格昔話の話型に該当するものであっても伝説として区分しました (該当する話には、タイトルの前に※を付しております)。なお、笑話のおどけ者話も地域の話ですが、笑を主とすることから伝説にはいれておりません。

地域別内訳は、次のとおりです。数が少ない地区がありますが、整った話が少なくことや未調査地があることなどの理由によるため、実際の伝承状況を反映しているわけではありません。

1) 三神地区

「絹巻の観音様由来 (観音様と継子)」 (No.28、神崎市脊振村)、「脊振山の石楠花」 (No.53、吉野ヶ里町)、「夜泣きの地藏さん」 (No.98、みやき町)

2) 佐城地区

※「内野堰の人柱」 (No.8、佐賀市富士町)、※「おとわ観音由来」 (No.16、小城市)、「徐福伝説」 (No.47、佐賀市諸富町)、「弘法大師とえつの魚」 (No.32、佐賀市諸富町)、「源太塚由来 (源太と万吾)」 (No.31、多久市)

3) 藤津地区

「有明孫兵衛話 (相撲取り)」 (No.4、白石町)、「和泉式部と足袋の始まり」 (No.5、白石町)、※「杵島山の松の精と三味線弾きの娘」 (No.27) (白石町)、「竹の新太郎さん」 (No.57、太良町)、「火の神さんと塞の神

さん」(No.78、嬉野市)、「ミソゴロドンの有明海干拓(巨人伝説)」(No.90、鹿島市)、※「餅つきにきた堤の主(大蛇の餅つき)」(No.94、白石町)

4) 杵西地区

「黒髪山の大蛇退治」(No.30、有田町)

5) 東松浦地区

※「炭焼長者(住友由来)」(No.51、唐津市巖木町)、「松浦佐用姫伝説」(No.87、唐津市)、「佐用姫と鏡山の大蛇(蛇婿入り)」(No.36、唐津市)

3 県内で伝承されている昔話の特徴 その一 動物昔話

県内で伝承されている昔話のうち、よく聞かれる話を対象に、動画のコメントでは説明しきれなかった点も補足して解説します。

動物昔話の中でよく聞かれる話は、動物の習性や形態の由来を説くものです。

本シリーズの話の中では、1)「十二支由来」(No. 45)の干支の順番の由来、2)「蛙の親不孝」(No. 19)の雨の降る前に蛙が鳴く由来、3)「雀と燕と蛇と蛙」(No. 50)の雀は米を食べ燕は虫しか食べることができない由来、4)「猿どんと蟹どん」(No. 38)や5)「猿の尻尾の由来」(No. 40)の猿の尻が赤い由来、6)「猿の生き胆」(No. 39)のクラゲの骨がない由来などです。

このうち、1)「十二支由来」、2)「蛙の親不孝」、3)「雀と燕と蛇と蛙」は、県内の動物昔話の中で最も伝承度が高く、「三大動物昔話」と言ってもいいものです。さらに、3話の中でも「蛙の親不孝」は伝承度が最も高く、全ての昔話の中でもトップクラスに位置しています。

この3話の伝承度が高い理由は、話が語り手や聞き手の身近にある動物の由来話の形式をとっているためだと考えられます。由来話の形式をとることで地域生活の中に根付き、伝承基盤を確立しているからです。

また、動物昔話は、昔話の聞き手である子供達が最初に聞く昔話です。

話が短いこともあります。小さい頃に聞いた記憶は比較的後年まで残っているものです。また、登場する動物は、身の回りの生活の中で見かけることが多く、その動物を見るたびにこの話を思い出し、記憶が固定されていったことも、こうした話の伝承度が高い理由ではないかと考えます。

上記6話のうち後半の3話は、前半の3話と比較すると、比較的話が長くストーリーも複雑です。聞き手が同じ子供だとしても、幼児に対しては前の3話、その後、成長していくにつれ後の3話のように、年齢に応じて話を使い分けられていたようです。

さて、このように動物の習性や形態の由来を説く動物昔話は、比較的伝承度が高く、県下全域で聞かれますが、次のように、一部の地域でしか聞けないような話もあります(いずれも本シリーズに未収録)。

(1) 「チョウヒン鳥の親不孝」(有明海沿岸部でしか聞けない話)

この話は、先程紹介した「蛙の親不孝」が、雨の降る前に蛙が鳴く由来を説くのに対し、潮が満ちてくる前に干潟の鳥が鳴く由来を説く話です。

現在のところ、有明海沿岸部の干拓地を中心に伝承が確認されているのみです。

ストーリーは、「蛙の親不孝」とほとんど同じです。

異なるところと言えば、主人公の蛙が有明海の干潟に生息する鳥に変わっている点と、雨の降る前に鳴くという設定が、潮が満ちてくる前に鳴くという設定に変わっている点だけです。

例えば、佐賀市川副町で採集された話では、次のようになっています。

「チョウヒン鳥の親不孝」(要約)

昔、親の言いつけの反対ばかりする子供がいた。親は、自分が死んだ時に、「陸に埋めてくれ」と言ったら、子供が反対をして自分を海端に埋めるだろうと思い、「自分が死んだ時は海端に埋めろ」と言った。そうしたら、その子供は、親が死んだ時に初めて自分のしてきたことを後悔して、親が死んだ時だけでも親の言うとおりにしてやろうと、親を有明海の家端に埋めた。それで、潮が満ちてくると墓が潮に流されそうになるため、鳥になり、「チョウヒン、チョウヒン、チョウヒン」と言って飛び上がって鳴くという。

～「川副の口承文芸」(昭和53年発行)より～

ア 伝承範囲は有明海沿岸の干拓地が中心

この話型は、現在のところ、有明海沿岸部の一部の地域でしか伝承が確認されていません。

現在、伝承が確認されている地域は、佐賀市の諸富、川副、東与賀、久保田、小城市の牛津、芦刈の干拓地です。

同じ干拓地を持つ白石、鹿島、太良では、まだ伝承が確認されていません。

牛津町での調査では、主に、国道34号線を境に北の内陸部では蛙、南の有明海に近い所では鳥という風に、伝承範囲が線引きされています。

こうした事実が佐賀の干拓の歴史(特に、江戸時代の佐賀藩の干拓の歴史)と関わりがあるかは、今後の研究課題です。

これを明らかにするためには、筑後川を挟んだ福岡県側の伝承はどうなっているのか、現時点で伝承が確認できない白石、鹿島などの有明海沿岸部には本当に伝承が無いのかなどの疑問を解消していく必要があります。

イ 鳥の名前が地域により異なる

この話は、主人公の鳥の名前が地域により少しずつ異なっていることも特徴の1つです。チョウヒン鳥という名称は川副町に圧倒的に多い名前ですが、東隣の諸富町では、「チョウヒン鳥」の他に「トヘイ鳥」や「シッタタキ」などの名称が混在しています。

一方、西隣の東与賀町では「潮水鳥」の名称が圧倒的です。

また、嘉瀬川を挟んで久保田町や芦刈町では「チョウヒイ鳥」、少し離れた内陸部の牛津町では「千鳥」などの名称になっています。

「チョウヒン鳥」や「トヘイ鳥」という名称は鳥の鳴き声から、「潮水鳥」は鳥の生息する場所から、「シッタタキ」は鳥の動作からきていると思われます。

ところで、主人公の鳥が干潟にいる鳥であることは間違いないと思いますが、学名上、何と言う名称の鳥かの特定ができていません。ひょっとすると、鳥の名称がこれだけ異なっているということは、この話の主人公の鳥は、地域によって、あるいは語り手によって異なっているのかもしれない。

このように、主人公の鳥の名前一つとりあげても、「主人公の鳥は学名上何という鳥なのか」や「鳥の名前が合併前の旧市町毎で異なっていることが何を意味しているのか」など、この話を巡る不思議は残っています。

ウ 生活の中に根付いている

この話が生活の中に根付いており話される機会が多かったということは、親の言いつけの反対ばかりする子供には、「チョウヒン鳥のごたっ」と言っていたとする語り手の話からもうかがい知ることができます。

この点は、「蛙の親不孝」が親の反対ばかりする子を、蛙の名前からとって「ホトケビッキーのごたっ」(旧佐賀市)と言ったり、話の内容(山に行けと言えば川に行く、川に行けと言えば山に行く)からとって「山川もんのごたっ」(佐賀市大和町)と言っていたとすることと同じことだと考えられます。

エ まとめ

この話は、「蛙の親不孝」が有明海沿岸部において独自の変化を遂げた結果、他の地域にはない有明海沿岸部特有の話として定着していったものと考えられます。

この話がいつ、どのようにして生まれたかは明らかではありませんが、有明海の干潟に集まってくる鳥の生態、さらに有明海の干拓地の広がり等のこの地域独特の背景がこの話の発生と成長に大きく関係していることは間違いないと思います。

(2) 「時鳥(ほととぎす)の鳴き声由来」(佐賀県でしか聞けない時鳥の鳴き声の由来話)

この話は、時鳥の鳴き声が「カッチャントケタカ」と聞こえるとする由来を説く話です。これまで、県外では同様な話は確認されていません。

佐賀市の語り手、納富信子さんの話です。話の内容は、次のとおりです(本シリーズには未掲載)。

「時鳥の鳴き声由来」(原文のまま)

むかーし、かっちゃんていう女の子がね、櫛でいくらけずってもけずっても、髪がほぐれんもんじゃい、いつも、お母さんが湯でのぼしたいして、解いてやいよったらしかもんね。

そいぎい、お母さんが死んでしまって、二番嬢(が)さんが来たもんじゃい、かっちゃんの髪ばほぐして、解いてやっ者(もん)のおらんごとなつて。

お母さんのおる間は、髪ば櫛でけずってもらいよつたばつてん、二番嬢さんになつたぎい、そがんことしてくれんもんじゃい、自分で解かんばでしょう。そいもんじゃい、解けんもんじゃい、死んだお母さんがホトトギスになつてね、お母さんがしてやらんぎい、誰(だい)でんしてやる者のおらんもんじゃい、

そいで、お母さんが、「かっちゃんとけたか。かっちゃんとけたか」ちゅうて、死んでからまで、自分の生んだ子が心配やもんだから、鳴くんだつて。

そいぎい、ばっきや

～「さが昔話」(平成14年発行)より～

ア 伝承範囲は佐賀方言区内か

この話は、脊振の山間部を中心に、佐賀市、小城市、嬉野市など、県下一円に広がっています。現在、分かるだけでも、十数話が確認されています。

ただし、方言区が異なる唐津市周辺(唐津方言区)や鳥栖・基山(田代方言区)からは採集されていない

ことから、ひょっとすると、佐賀県内でも江戸時代の鍋島藩域である佐賀方言区内での伝承に限られるのかもしれない。

この点については、もう少し詳しい採集資料の整理とさらなる資料の収集が必要と考えられます。

イ 時鳥の鳴き声の聞きなしが他県と異なる

動物、特に鳥の鳴き声に意味を持たせて聞くことを、一般的に「聞きなし」と言います。

時鳥は、「トウキョウトツキョキョカキョク」に代表されるように、鳥の中でも、特に聞きなしの種類が多い鳥です。

鳴く時の時間の長さ、一瞬甲高く鳴く声が、他の鳥に比べて際立っていることや、別名「たまむかえどり」などとも呼ばれ、古くから、霊界とこの世をつなぐ鳥として日本人に親しまれてきたことも影響しているのではないかと思います。

実は、この時鳥の鳴き声の聞きなし方が、佐賀県と他県では明らかに異なっているのです。

具体的には、佐賀県では「カッチャントケタカ」が一般的ですが、他県では、「オトトコイシ」とか「オトトキタカ」などと聞きなししているところがほとんどなのです。

ちなみに、隣の福岡県では「ほっちょかけたか、おとと恋し」、長崎県では「おととはきたか、おととはおらんか」、熊本県では「たんたんたけじよ、おととが恋しい」とされており、弟という言葉が必ず出てきます。九州だけでなく、本州においても同様です。

佐賀県での時鳥の聞きなし方は全国的にみて孤立しており、佐賀独特と言っても過言ではないような気がします。

長崎、福岡、熊本は同じ方言区（九州西部方言区）であるにもかかわらず、このように時鳥の聞きなし方が違うということがどういう意味をもつものなのか、今後の研究課題です。

ウ 聞きなしに付随する由来話も異なる

さらに面白いのは、時鳥の鳴き声の聞きなし方だけでなく、聞きなし方に付随する由来話そのものも佐賀県と他県とでは異なるということです。

具体的には、他県においては、「オトトコイシ」という聞きなし方で、次のような話が伝承されています。

「ほととぎすと兄弟」（加筆あり）

弟が盲目の兄に掘ってきた山芋のうまいところを食べさせ、自分は山芋の首を食うが、ひがんだ兄が弟はうまいところを食べていると疑う。

それで、弟が腹を切ってみせると、山芋の首のところが入っている。

兄の目が開き、真実を知って後悔した兄はほととぎすになって、「おととはきたか、おととはおらんか」と鳴く。

～「日本昔話通観 第24巻」（昭和50年発行）より、一部分かりやすいように加筆～

この話は、話型としては「時鳥兄弟」とされており、同じ話は、北の青森県から鹿児島県まで全国で伝承が確認されています。一方、佐賀県内では、この話は伝承例がほとんど確認されていません。

ほとんどとしたのは、多くの昔話を知っている本格的な語り手の中には、この話を知っている人がいるか

らです。

例えば、佐賀市内の本格的な語り手である納富信子さんは、両方の話を知っておられます。

ただし、時鳥の鳴き声の由来として最初に納富さんが話されたものは、前出の「時鳥の鳴き声由来」の方でした。その後、こちらの方から「時鳥兄弟」の話もご存じかどうか聞いたところ知っているとのことでした。本人としては、「時鳥の鳴き声由来」の方が、時鳥の鳴き声の由来話としてはしっくりきていたのだらうと思います。

エ まとめ

これまでの話から、やや短絡的ではありますが、次のようなことが言えると思います。

「時鳥兄弟」は、全国的に圧倒的な広がりを持っていることから、いつの時代かは分かりませんが、当然佐賀県にも入ってきたと考えられます。

しかし、既に、県内には、同じ時鳥の鳴き声の由来を説く「時鳥の鳴き声由来」という話が別にあったことから、本格的な語り手以外には伝承の広がりを見ることができず、結局根付けなかったのではないかと推測されます。

しかし、「時鳥の鳴き声由来」の話が、いつの時代にどのようにして佐賀に生まれたのか、謎は残ったままです。

4 県内で伝承されている昔話の特徴 その二 本格昔話

本格昔話の中では、習俗等の由来を説く話がよく聞かれる話の代表的なものです。その中でも、年中行事と通過儀礼の由来を説く話がよく聞かれますので、各々1話紹介します。

なお、年中行事とは、例えば正月行事や盆行事など、毎年行われる習俗のことで、通過儀礼とは、例えば出産儀礼や葬式など、人が生まれてから死ぬまでに関わる習俗のことを言います。

(1) 「3月3日の桃酒由来」

この話は、年中行事のうち、3月3日の桃の節句に、「女の子は桃酒を飲まなければならない」とする由来を説く話です。

分類上は「蛇婿入り（苧環（おだまき）型）」と呼ばれる話型群に属します。

本シリーズでは取り上げていませんので、改めて、話を紹介します。小城市三日月町で採集された話です。

「3月3日の桃酒由来」（原文のまま）

毎晩、男が娘のとりえ（所へ）通うて来よったばってんが、その男が誰（だい）こっじゃいなんた、分からんやったて。

そいぎ、その娘のおっ母さんじゃろう、心配して、「着物の袖に針ば刺して、糸ばずーっと引くごとしと きんしゃい」て言いなつたて。

そいぎ、そがんで男の跡ばずーっと付けて行つたぎ、糸が堀ん中になんた、大きな池の中につながつていっとなつたて。

そいぎ、その、「針ばぬかれ（刺され）とっけん、死ぬばってん、蛇の子ばはらませとっ。そいでん、3月の桃の節句に桃酒ば飲むぎ流るっ」て、そがんで言うて、（蛇が）池の中で話ばしよつたて。

そいで、早速、3月3日に、その娘に桃酒ば飲ませんさつたぎんと、蛇の子が何匹でん出てきたて。

そいから、3月の節句は、桃酒ば飲むごととなつたて。

～「三日月の民話」（平成3年、佐賀民話の会）より～

ア 伝承範囲と習俗の由来について

この話は、県内のほとんどの地域で聞くことができます。

そのほとんどが、3月3日の節句に、桃酒（あるいは、白酒に桃の花を浮かべたもの）を飲ませたら、蛇の子供がおりたとする話ですが、中には、3月3日の桃酒だけではなく5月5日の菖蒲湯にも浸からなければならないとする話（佐賀市）や、桃酒ではなくヨモギ餅を食べなければならないとする話（基山町）もみられます。

イ 古代から伝承されてきている古い話であること

この話は、日本の昔話の中でも非常に古い話として知られており、その源は平安、奈良、さらにその前までも遡ることができるかとされています。

実は、このシリーズの「佐用姫と鏡山の蛇(蛇婿入り)」(No. 36)の話も、昔話ではなく伝説になっていますが、類似のストーリーを持つ話です。この話は、コメントにも書いていますように「肥前国風土記」に記されている話で、同資料は8世紀前半の成立とされていますので、その頃には佐賀にも同様な話が伝承されていたと考えられます。

この「佐用姫と鏡山の蛇(蛇婿入り)」(No. 36)の話と本話の「3月3日の桃酒由来」を比較してもらえると分かりますが、蛇の性格が両者では大きく異なっています。

前者では、蛇は、実は鏡山の神であったとされているように敬われる存在ですが、後者では災いの対象とされ忌み嫌われる存在になっています。

この蛇に対する意識の違いは、前者が最後に蛇を神として祀る部分に、後者が3月3日の桃の節句に桃酒を飲んで蛇の災いを払う部分に端的に表れます。また、後者の話で、蛇が、聞かれているとは知らずに災いを払う方法を話してしまう部分は、蛇の滑稽さを笑っているようでもあります。

「蛇婿入り」という話の凄いところは、「佐用姫と鏡山の蛇(蛇婿入り)」(No. 36)のような古い時代の話が、時代を経るにつれ、神話や伝説の衣を脱ぎ捨て、昔話として、民衆の生活の中をしっかり根を下ろして行ったことです。その根付づく基になったのが、この「3月3日の桃酒由来」の話だと思います。

ウ 最近の経験譚のように話されるものもあること

「3月3日の桃酒由来」の話は、年中行事の由来を説く話の中でも代表的な話で、県内でも多くの地域で必ずと言っていいほど聞かれる話ですが、地域によっては、実際に経験した人がいたかのように、リアル感をもって話されるものもあります。

「3月3日の桃酒由来」(原文のまま)

3月3日の桃酒のゆわれはなた、お婆ちゃんから聞いた話はなた、

むかし、お寺の娘さんが、誰か分からんで、お腹の大きゅうなつたて。

そいぎんと、村中の青年ば寄せて調べたけれど、「俺(おり)あ知らん、俺(おり)あ知らん」て言うて、どがんで調べてもわからんで。

それで、毎晩来よらしたちゅうもんじゃい、村中の若っか者が、「お寺の周囲ばグルーって囲うでしとこじゃっか」て言うて、お寺のお御堂の周りばグルーっと番しとつたて。

そがんで、10日しても、15日しても見つからんで。

そいぎ、「困ったもん、ぎゃんしても見つからない、どがんなつちやろか」ちゅうて言いよつたところが、次ぎの晩に、棚の隙間から蛇が入ってきよつたのが見つかったて。

そいぎ、「どこさん行くじゃろうかい」てジーっと見よつたところが、娘さんの寝とつとこさい入っていつたて。

そいぎ、村の若っか者(もん)がなた、「こりゃあ、私達の手じゃあ押さえきらん」ちゅうて、「狩人の良かとは呼んでこんば」て言うて、狩人に頼んで、狩人が番しとつたて。

そいぎ、やっばい、晩になつたぎ、棚の隙間から蛇が入ろうてしよつたので、鉄砲で打ったぎなた、ズーッと逃げていたて。

そいて、翌朝、ズーっとその血ば辿って行つたぎ、穴の開いたところまで続いていたとつたて。

そいたら、穴の中から蛇の声のすつて。

「何十年て、我が子の種ば人間におろしたか、て思うとったぎ、ようようおろしたけんよかばってんが、すぐ3月3日に節句のくっ。3月の節句の桃酒じゃあが飲んでくれんぎんたあ、りっぱに子供は育つ。飲んでくれんぎ、よかばってん」ちゅうて言いよつとの聞こえてた。

そいぎ、帰って、和尚さんにそがん言うて話したぎ、「そいないば」ちゅうて、3月3日に桃酒ば飲ませて、飲ませてから、盃の中に水入れて、そいて、水の中にびき(蛙)入れて、「ここん上いまたがれ」ちゅうて、蛇の子を降ろさせたて。

そいけん、3月3日には、桃酒ば飲まんばでけんばい。そいから、障子の棧に隙間のなかごとしとかんとでけんばい、て婆さんが言いないよつた。

そいばつあきや

(注) この話は、佐賀県立図書館による「平成25年度口承文芸デジタルアーカイブス整備事業」(故宮地武彦先生他が採集した昔話等の磁気データをデジタル化したもの)により記録されたデータの中から、筆者が新しく聞き起こしたものです。

この話は佐賀市東与賀町で採集された話ですが、針を刺すのではなく鉄砲で撃つとする場面、糸の跡ではなく蛇の血の跡を辿って行ったとする場面、盃の中で蛇の子を下したとする場面など、かなりリアルな話になっています。時代は昔ではなく、語り手かあるいはその1~2世代前の人が生きていた時代のような感じですが。内容も、語り手の知っている人が体験した話のようなニュアンスに仕上がっています。

その意味では分類上は、昔話でもなく伝説でもない、むしろ身近な経験譚の世間話と言った方が妥当なように思います。昔話の変化を知る上で面白い資料だと思います。

※参考

年中行事の由来を説く話は、この話の3月3日の桃酒の由来を説く話の他にもたくさんあります。本シリーズの中でも、正月の行事の由来にかかわる「正月のウラジロ由来」(No. 46)、2月3日の豆まきの由来を説く「節分の起源」(No. 52)、5月5日の厄除けの由来を説く「飯を食べん嫁さん(5月5日の菖蒲由来)」(No. 91)、7月7日の七夕の由来を説く「七夕さんのはじまり」(No. 58)などを紹介しています。

(2) 「子育て幽霊」

この話は、お腹の大きくなった妊婦さんが死んだ時、お腹の中の子は出して埋めなければならないとする、通過儀礼のうちの葬送習俗の由来を説く話です。

分類上は「異常誕生譚」と呼ばれる話型群に属します。

話の内容は、本シリーズの「飴がたやさんと幽霊(子育て幽霊)」(No. 3)の話を参照してください。

ア 伝承範囲と習俗の由来について

この話は、県内のほとんどの地域で聞くことができます。

習俗の由来については、ほとんどが、「死んだ妊婦のお腹の中の子供は出して埋めなければならない」由来として話されていますが、中には、「死んだ時は六文銭などのお金も必ず入れておかななければならない」とする話も見られます。

また、本シリーズの話「飴がた屋さんと幽霊（子育て幽霊）」(No.3)のように、お腹の中の子供を出した後に、塩水に浸けた麦をきれいにつめるとか、子供が死んでいたら、産着を着せて抱かせてやるとか、関わりのある埋葬の習俗を丁寧に語るものもあります。

イ 架空の話としてよりも実際にあった話として話されていること

この話は、県内では妊婦の葬送の時の話とされています。

地域によっては、話に登場するお寺やお墓が実際にあるとする所もあります。本シリーズの話では、お墓の中で生まれた子供に与えるものは飴方（水飴を練って切った菓子。妊産婦の滋養に良いとされている。）とされており、語り手は、その飴方を売っているお店が実際に今でも佐賀市内で営業していると話しています。

このように見ると、この話は、虚構の世界の話を語ることを主とする昔話とは異なりますし、かといって伝説とするのも適切でないように思います。

先述した「(1)3月3日の桃酒由来」でも書いておりますように、こうした話はむしろ、世間話に分類した方が妥当と考えられます。こうした分類上の疑問は、今後検討して行かなければならない研究課題です。

ウ 近世における妊婦の死亡率との関わり

この話が伝承されてきた背景には、近世までの日本における出産事情もからんでいるようです。

現代医学の進歩は著しく、現在、妊婦が死亡することはほとんどないと考えられますが、近世以前においては、妊婦が死亡することは多かったようです。統計が取り始められた当初のデータ(1899年の妊婦死亡率)では、約1,000人に4人の妊婦が死亡していたとされています。

このため、妊婦の死に対する人々の関心も高いものがあり、こうしたことが、この話の伝承を支える一つの大きな要因になっていたのではないかと考えられます。

エ その他

この話は、話型群の名称の「異常誕生譚」という言葉からも分かるように、本来は、異常な誕生をした子供のその後の活躍を主な内容とする話です。

東日本においては、有名な高僧の誕生の話として伝説化されているものが多いようです。兵庫県三田市にある水沢寺は、禅宗の高僧である通玄和尚が開山した寺として有名ですが、この通玄和尚が墓の中で生まれたという話として、関西を中心に大きな伝承圏を形成しています。

なお、蛇足ですが、母親と共にお腹の子供も死んでしまうと、母親は死んでも死にきれず妖怪になると言われています。これが、「産女（うぶめ）」と呼ばれる妖怪です。

産女は約束を守った者には力を与えるという妖怪で、本シリーズの「有明孫兵衛話（相撲取り）」(No.4)は、この産女から力ももらって相撲取りになった人の話です。

(3) 「継子と尺八」

習俗の由来に直接結び付く話ではありませんが、関係する話をもう1つ紹介します。(1)(2)と同様、県内ではよく聞かれる話です。

この話の内容は、本シリーズの「父さん恋しやチンチロリン（継子と尺八）」(No.63)を参照してください。分類上は「継子話」と呼ばれる話型群に属します。

ア 県内は継子話の伝承度が高い

県内における「継子話」の伝承度は高く、例えば、「さかの民話」(昭和51年、佐賀市教育委員会編集・発行)では、本格昔話65話のうち18話(27.6%)が継子話で4分の1以上を占めます。

県内で伝承されている継子話のうち全国的に話型が認められる話だけを取り上げてみても、1)「継子と尺八」の他、2)「継子の歌詠み(皿々山)」(No.88)、3)「継子の椎の実拾い」(本シリーズには未掲載ですが、No.42の話は継子がお爺さんに入れ替わっただけの話です)、5)「手無し娘」(未掲載)、6)「鉢かづき姫」(未掲載)、7)「灰坊(継子の風呂たき)」(No.79)、8)「お銀こ銀」(未掲載)、9)「継子の亥の子餅」(未掲載)、10)「絹布団と藁布団」(未掲載)など沢山あります。

このうち、最初の3話は県内でよく聞かれる継子話です。佐賀県の三大継子話と言ってもいいくらいですが、その中で「継子と尺八」は最も伝承度が高い話です。

イ 「継子と尺八」の伝承度が特に高い理由

「継子と尺八」は、継母から釜茹でにされた継子が、尺八の音色に込めて父親に自分が殺されたことを伝える話です。

(伝承度が高い理由の1)

この話が特に伝承度が高い理由の一つは、話の中の尺八の音色です。具体的な音色は、「京の太鼓もいーらんかな、京の笛もいーらんかな、お父あんの体、早よおいで」(三養基郡基山町)であったり、「お父さん恋しやチンチロリン。嬢さん恨めしチンチロリン、京の硯はもういらん、京の鏡はもういらん」(小城市三日月町)や「京の硯は何にしゅう、京の鏡は何にしゅう、ああ恨めしチンチロリン」(嬉野市嬉野町)であったりと、語り手により微妙に異なりますが、父さんが恋しいという内容、土産の名前(太鼓、硯、鼓等)、チンチロリンと鳴るフレーズなどは共通して、よく出てきます。

この音色が、聞き手の記憶に残って、この話の伝承に役買っていたと考えられます。このため、話は覚えていなくても、この歌だけ覚えている人が沢山います。筆者も、継子話が出そうにない時、このフレーズを聞き出す際の糸口にしていました。

ただ、このフレーズがあるというだけでこの話が継子話の中で特に伝承度が高い理由にしてしまうのは、少し無理があると思います。

同じような歌のフレーズを持っている話は他の継子話にも見られるからです。例えば、「皿々山」(小城市牛津町)では、一つの話に「皿々と皿竹山に松植えて、松の根元に積もる白雪」や「嬢さまにぶたれ叩かれ掃き出され、伯耆の国をとるぞ嬉しき」等の歌があり、「継子と尺八」のメロディーと同じようにこの話の記憶を支えていたと考えられます。

(理由の2)

伝承度が高いもう一つの理由として、筆者は、次のような話がこの話の伝承に強く影響を与えていたからではないかと考えています。

「継子の釜茹で」(原文のまま)

二番母 (かか) さんが、そけえ八枚釜で炊きないよったけんね、通いがかった旅の虚無僧さんのような人がね、「こい、何 (ない) 炊きよっかんたあ」て言うたぎ、「ああ、味噌豆炊きよっ」て言いなつて。

そいけん、「ちょっと食わしてもらえんじやろうか」て言うたぎ、「まだ煮えとらん」て言われたて。

そいばってん、本当 (ほん) に気にかかったもんじやい、七里でん行たてからたち返ってね、「ちょっと見せろ」て言うて見んさんたぎ、継子ば煮よんさつたて。

そいけんが、味噌豆は七里でんたち返ってでんた食ぶつごとね、「誰 (だい) でん、人の来た時は、誰 (だい) でん食べらせんばならんばん」て言いないよったもんね。

～佐賀市大和町の昔話採集データ (未刊行) から聞き取りしたもの～

この話は、「味噌豆を炊く時は、七里たち帰ってでも食べなければならない」とする習俗の由来に結び付いています。さらに、年中行事や通過儀礼とは異なり、日常的な家事労働の際の話なので、話を聞く頻度はことのほか多かったと思います。

このため、「3月3日の桃酒由来」や「子育て幽霊」より伝承度が高く、習俗等に由来する話の中では、最も伝承度が高い話と言っていいかもしれません。昔話を採集するため集まってもらったお年寄りの中に、この話を知っている人が複数いることはよくありました。

この話 (継子の釜茹で) と「継子と尺八」は、ストーリーが異なっていますので話型は異なりますが、継子が釜茹でされるという部分は共通の要素です。

中には、この話が「継子と尺八」の中に取り込まれているものも見かけます。

この話との類似点が、「継子と尺八」の伝承度の高さを引き上げているもう一つの理由と考えてもおかしくないと思います。

※参考

数は少ないですが、佐賀の昔話には世界の昔話とつながるような話もあります。その中から一つ紹介させていただきます。

○ 「七夕さんのはじまり (天女の羽衣)」 (No.58)

(この話は「白鳥処女説話」として世界中に分布している)

この話の前半部分は、日本では羽衣伝説としてよく知られている話です。謡曲の有名な「羽衣」はこの話を能楽にしたものです。外国では、「白鳥処女説話」と呼ばれ全世界で伝承されています。「白鳥の湖」の原作とされるムゼウスの「奪われたヴェール」もこの話が元になっているようです。

この話がいつ日本に入って来たのか分かっていません。ただ、古い時代に、世界のどこかでこの話の原型ができあがり、長い歴史を経て世界中に広まり、その一つが日本にも入ってきたのではないかと言われています。

(ギリシャ神話の中にも同じような話がある)

この話 (白鳥処女説話) と同じではありませんが、ギリシャ神話の中に次のような話があります。

プレアデスの7人姉妹が森の中で遊んでいると、オリオンが現われ追いかけてまわします。このため、女神アルテミスは姉妹を哀れに思い、真っ白な鳩にして空に逃がしてやります。そして、姉妹はそのまま星になったということです。

この星が、おうし座の角の部分にある7つ星の「プレアデス星団」です。日本名は「昴(すばる)」といいます。

プレアデス星団は、天文学では、7つの恒星の集まりで、地球から700光年離れたところにある若い散開星団とされています。その中に、視力のいい人でも良く見ないと分からない星が一つあります。

この星の光が弱い理由について、ギリシャ神話は、星になった7人姉妹の末の妹が人間と結婚したため空に戻れなかったから、と伝えています。

話に多少の違いはありますが、娘の1人が人間と結婚したため空に戻れなかったという点は本シリーズの話と同じです。

なお、最初に断っておりませんが、本シリーズのこの話では、天から来た娘は7人ではなく3人です。日本や世界にある同じ話の分析の結果、この話の原型は、7人の娘である、と言われておりますので、この話の3人というのは、伝承過程における変化だと考えられます。

(星が見えなくなるという天体現象がこの話の成立に関わっているかも?)

プレアデス星団の中で見えにくいこの星は、メソポタミアや中国の古い資料によると、紀元前の古い時代には、他の星と同じくらいの光度で輝いていたとされており、どうも、古代のある時期に見えなくなってしまったようです。

この原因については、まだよく分かっていません。ただ、事実とするなら、夜空に輝く星の消滅に近い天体ショーを世界中の人が見たこととなります。そうした人々が、7人姉妹の一人が地上に降りたため星が見えなくなったのだと考えたとしても不思議ではありません。

星は世界中のどこからでも同じようにみえます。そして、古代より農耕や航海など人類の生活になくしてはならないものでした。世界のどこかで生まれた白鳥処女説話の原型が世界中に広まった背景には、人類が共通して持っていたこのような星座への強い関心があったように思います。

そう考えると、少々大宜座ではありますが、この話は人類の星座への関心が生み出した壮大な物語ではないかなどと、ふと思ってしまいます。

こうしたことを思いながらこの話を聞き、夜空を眺めるのも、また面白いと思います。

5 県内で伝承されている昔話の特徴 その三 笑話

(1) 勘右衛門話

県内で最もよく聞かれる笑話は、何と言っても「勘右衛門話」(カンネ話)です。

大分の吉四六話、熊本彦市話ほど有名ではありませんが、勘右衛門が佐賀県を代表するおどけ者であることは間違いありません。

記録化されていない話も含めると、採集された話数の総数は1,000話近くになると思われます。

ア 伝承範囲

伝承範囲は、唐津市を中心に、周辺部の西松浦郡玄海町、伊万里市、西松浦郡有田町、さらに、峠を越えて南の武雄市、多久市、さらに、小城市、佐賀市、神崎市までも広がっています。恐らく、県域を超えて、福岡県糸島市にも伝承されているものと思われます。

イ 代表的な話等

代表的な話は、「涙がこぼれる、泥鰯汁(勘右衛門話)」(No. 65)、「勘右衛門話(一番高つか山)」(No. 24)、「借金取りの香典(勘右衛門話)」(No. 44)、「勘右衛門話(息子のほら比べ)」(No. 26)などですが、これらは全て勘右衛門が頓智者か狡猾者の話です。

一方、後述するように勘右衛門が愚か者になっている話もあり、こうした話も含めると、種類数もかなりの数になります。

ウ 勘右衛門話の数が多い理由

勘右衛門話が他の笑話と比較して数や種類が特に多い理由は、東松浦地区では、笑話と言ったら勘右衛門話と言われるくらい勘右衛門話が有名なことから、勘右衛門話が笑話の核のような存在になっていたことによると考えられます。

このように有名になると、笑い話の主人公は全て勘右衛門さんに想定されると同時に、新しい笑話が他地区から入ってくると、直ぐに勘右衛門さんがした話のように変化していき、笑話といえば勘右衛門話のようになっていったと思われます。

例えば、「厳木の民話」(昭和55年発行、厳木町教育委員会)では、掲載している笑話約120話のうちの100話近く(約83%)を勘右衛門話が占めていることから、いかに圧倒的な伝承力を誇っていたかが分かります。

また、旧唐津市内では、勘右衛門さんは、実際に江戸時代、唐津の裏町に住んでいた人と言われており、墓もあるそうです。こうした実在の人物を想定していることも、勘右衛門話の伝承圏が拡大していった要因の一つだと考えられます。

エ 勘右衛門話の中の愚かな話

上記のように、勘右衛門話は勘右衛門を笑い話の核として色々な話を取り込んで広がっていきませんが、このことが、勘右衛門話の中に愚か者話も取り込んでしまうという結果にも繋がっています。

次の話は、愚か者の代表的なもので、所によっては、この話の方が勘右衛門話の代表的な話になっている

ところもあります。

「勘右衛門話 (甘酒、奈良漬、欠け茶碗)」(原文のまま)

勘右衛門さんがですよ、ひさしぶりにおぼっちゃん (叔母さん) の家に遊びに行ったら、「そいないば、白飯炊 (ちゃ) あて食わしゅうねえ」て言うて、米ば研ぎよんさったぎ、鼻水の落ちたけんね、そいけんね、「もう、食べん」て言うて帰んさったて。

そいから、また行ったらね、甘酒ば作っちゃったそうです。そいて、「飲まんか」て言いんさったけんね、知らじい飲んみんさったぎ、おぼっちゃんの、「この前、お前がね、ご飯食べんやったけん、あいで甘酒作った」て言いんさったて。

そいけん、鼻水で作った甘酒やったもんじゃい、気持ちの悪うなって帰いよったら、奈良漬の落 (う) っちゃえとったけん、その奈良漬を食べたて。

そうしたら、向うから、痔の悪うした人の来てね、「お尻に挟んどった奈良漬ば落としたりけん、この辺に落ちとらんやたらろうか」て言いなつたけん、また気持ちの悪うないなって、また行きよらしたて。

そいぎ、お茶屋があつて、そこに目の悪かごたつ爺ちゃんの一人おんさったて。

そいて、茶碗が一つ欠けたのがあつたので、この欠けた茶碗では飲んどんさんやろうて、勘右衛門さんな、その茶碗で飲みよつたら、孫がチョロチョロ出てきて、「あら、爺ちゃんの茶碗で飲みよんさつ」ち言うたて。

～「小城の口承文芸」(平成17年発行、小城町教育委員会)より

また、本シリーズで取り上げた「勘右衛門話 (大飯食らいの嫁さん)」(No. 25) は、明らかに笑話ではなく、さらには主人公が誰なのかも分からない話になってしまっていますが、これも、元々別の話が勘右衛門話の中に取り込まれた結果です。

オ 県内の同じおどけ者話

口承文芸の世界では、勘右衛門話のような話は地域のおどけ者話と言われており、県外では、大分の吉四六話や熊本の彦市話などが良く知られています。

県内では、勘右衛門話以外にも、太良町の善右衛門話 (ゼンネン話)、吉野ヶ里町の横道孫兵衛話 (オウドウマゴベイ話)、嬉野市の久惣十話 (クソジュウ話) 等があり、それぞれの地域で人気を博しています。

なお、主人公の職業はというと、太良の善右衛門は猟師や大工といい、吉野ヶ里の横道孫兵衛と嬉野の久惣十は農民といわれるようです。ちなみに、勘右衛門は、町人といったり農民といったり、必ずしも決まっているわけではありません。こうしたおどけ者の職業が、伝承の広がりによどのようにかかわっていたかは、今後の研究課題です。

カ おどけ者がいない地域では

こうしたおどけ者がいない地域では、「七兵衛・八兵衛話」という笑話がよく聞かれます。話は、勘右衛門話とほぼ同じような内容です。

七兵衛・八兵衛がどこの人かは特定されていませんが、逆にこのことが、おどけ者のいない地域において

話が伝承されていくためには、好都合だったと考えられます。

(2) その他の笑話

笑話には、勘右衛門のような頓智者の話がある一方、愚か者の話もたくさんあります。

県内でよく聞かれる話としては、「ヨイショはダンゴ(団子簞)」(No.97)があります。この話は、県内くまなく伝承が確認されており、この話と動物昔話の項目で取り上げた「蛙の親不孝」の二つは、何処に行っても、ほぼ間違いなく出てくる話と言っても過言ではありません。

このため、私達が実際にお年寄りから昔話を聞く際は、この2つから聞き出すようにしているくらいです。

6 県内で伝承されている昔話の特徴 その四 伝説

(1) 佐賀県の三大伝説

佐賀県でよく聞かれる代表的な伝説は、県中央部（佐城地区）の「徐福伝説」、県西部（杵西地区）の「黒髪山の大蛇退治伝説」、県北部（東松浦地区）の「松浦佐用姫伝説」の3つです。

それぞれ、各地区に根付いて強い伝承力を持っています。

ア 徐福伝説

徐福伝説は、徐福が上陸したとされる佐賀市諸富町と不老不死の薬草があるとされる佐賀市金立町を中心に伝承されています。佐賀市以外にも武雄市や白石町にも痕跡があり、こうしたものまで含めると、三神地区、佐城地区及び杵西地区が主な伝承圏となります。

本シリーズでは、諸富町に伝承されている「徐福伝説」(No. 47)を取り上げました。

徐福伝説は、一般的には、金立山の不老長寿の薬草を捜す際のお辰さんとの恋物語の話が良く知られていますが、この話は、徐福一行がシケにあった際アミから助けられたとする話や、地元の漁師に筐の葉を流してエツの魚を与えたとする話、さらには、柿渋の匂いが嫌で搦（からみ）から出て行ったとする話などがあり、金立山周辺の農民による伝承とは違った、有明海沿岸部の漁師らしい話になっています。こうした話も、徐福伝説の全体像を知るうえで、欠かせない話です。

余談になりますが、徐福が上陸したとされる佐賀市諸富町の「浮盃」の地は、近くに、世界遺産に指定された三重津海軍所跡があることや、古くから中国との交易が盛んであったとする遺跡も見つかっていることなどから、この地に古くから良港があったことが推測されます。こうした良港の存在が、この地でのこの話の成立に大きな影響を与えたことが考えられます。

イ 松浦佐用姫伝説

松浦佐用姫伝説は、松浦佐用姫が領巾（ひれ）を振った領巾振り山（唐津市鏡山）や石になったとされる加唐島（呼子町）を中心に広がっていますが、海に身を投げた佐用姫の遺体が流れ着いたとする話（伊万里市）まで含めると、東松浦地区、杵西地区がその主な伝承圏となります。

本シリーズでは、一般に知られている伝説「松浦佐用姫伝説」(No. 87)のほか、佐用姫が同伴佐手彦を見送った後の後日譚である「佐用姫と鏡山の大蛇（蛇婿入り）」(No. 36)の2話を取り上げました。

後者は8世紀前半に編纂された「肥前国風土記」にあるものとほぼ同じ話です。古代の話がそのまま伝承されてきていることに驚きを感じます。さらに、この話は、奈良の三輪山神話と同じ内容の話で、蛇がまだ神聖視されていた時代の話であり、その意味で神話の時代の名残を感じさせる話です。

なお、こうした古代から現代までの蛇に対する人々の意識の変遷は、前述の「4 県内で伝承されている昔話の特徴 その二 本格昔話」の「(1) 3月3日の桃酒由来」を参照して下さい。

ウ 黒髪山の大蛇退治伝説

伝承範囲は、大蛇が7巻き半も巻いたとする天童岩がある黒髪山周辺を中心としていますが、鱗を牛にひかせて峠を越えようとしたとする話（唐津市北波多村）や同じく鱗を牛にひかせて通ったとする話（小城市牛津町）などの話まで含めると、杵西地区、東松浦地区、佐城地区まで広がりをみせます。

本シリーズでは、有田町において昭和55年に採集された話「黒髪山の蛇退治と地名起源」(No.30)を取り上げました。地名伝説だけが強調されて話の豊かさはもうひとつという感じがしますが、伝説は本来、昔話と異なり、話の豊かさには興味を示しません。興味を示すのは、時代、人、物などの事実だけです。こうした伝説の性格がこの話に如実に表れています。なお、詳しい話を知りたい方は、武雄市史等に詳しく掲載されていますので、そちらをご覧ください。

この話は、鎮西八郎為朝という英雄伝説に、万寿姫の人柱伝説や、さらに、地元の座頭も話に登場する等して、複数の要素が絡み合い出来上がった話と考えられます。加えて、地名由来伝説として周辺部にも広がりを見せており、その伝承力の強さは、大きなものがあります。

この伝承に関わったのが、地元の座頭の集団と言われています。自らの信仰を布教して歩く際、自らが登場するこの伝説も語っていたのではないかと思われま

(2) その他の伝説

このほか、伝承度は三大伝説程ではないにしても、それぞれの地域では根強く伝承されている話を、いくつか紹介します。

ア 人柱伝説

人柱伝説は、県内各地で聞くことができます。特に、佐賀平野部の嘉瀬川流域では、上流の三瀬村の「卒塔婆の人柱」から、富士町の「内野堰の人柱」、大和町の「石井樋の人柱」と続き、有明海沿岸部では、干拓の際の人柱の話である東与賀の「内土井の人柱」など、数多くの話がみられます。

成富兵庫茂安を取り上げるまでもなく、歴史上、嘉瀬川の治水管理は時の為政者の一大関心事だったことは周知のとおりですが、庶民にとっても大きな関心事だったことは、こうした話が各地に根強く伝承されていることからみても窺い知れると思います。

本シリーズでは、「内野堰の人柱」(No.8)として、佐賀市富士町の人柱の話を取り上げています。

この話は、前半部の、足半(「あしなか」といい、踵までない短い草履のこと)の緒の左ないの人を人柱にする部分と、後半部の、その後ものを言わなくなった娘の物語の部分に分かれます。

他の人柱伝説は、前半部だけで終了するものがほとんどですが、この話には後半部の話が付随していることによって、話全体のニュアンスが他の人柱伝説と大きく異なっています。前半部の話は明らかに伝説ですが、後半部の話は、ストーリー等をもっていますので、むしろ昔話だといえます。極端に言えば、この話が昔話として成熟していけばいくほど、前半部の話は、後半部の話の導入部としての価値しか持たなくなっていく

この話は、前半部の伝説的要素もしっかり持ちながら、後半部の昔話のおもしろさもしっかり持っており、伝説が昔話化していく過程を示す貴重な資料と言えます。

一説では、このような伝説的要素を内包した昔話が、日本の昔話の典型的なもので、西欧の昔話との大きな違いであると言われています。

イ 巨人伝説

県内には、巨人伝説が伝承されているところが3カ所あります。1カ所は、県南部の太良岳周辺、2カ所目が県北部の伊万里湾と唐津湾の周辺、そして3カ所目が鳥栖市の朝日山周辺です。

県南部の太良岳周辺の話は、有明海の干拓をしたとか、耕した跡が多良岳に沿って幾筋もある尾根だとか、有明海を足で跨いだとかいう話です。また、伊万里湾と唐津湾の周辺の話は、2つの湾にある島々は巨人が投げた土からできたというものです。一方、3番目の鳥栖市の朝日山周辺の話は、巨人が背負った籠(かご)の土がこぼれて朝日山ができたとするもので、前の2か所が自然の雄大さを背景にした話であるのに対し、多少、趣を異にしています。

巨人の名前についても、多良岳と伊万里・唐津の話ではミソゴロウといい同じ名前ですが、鳥栖の伝説ではウシどんと言われており、この違いも面白いと思います。

本シリーズでは「ミソゴロドンの有明海干拓(巨人伝説)」(No. 90)として、多良岳周辺の話を取り上げています。

全国の巨人伝説は、文献としては、古くは8世紀前半に全国で編纂された風土記の中に出てきます。具体的には、現存する5か国分の「風土記」のうち「出雲国風土記」と「播磨国風土記」の中にみえます。しかし、佐賀県のことを扱った「肥前国風土記」には全く出てきません。県内における現在の巨人伝説がいつ頃から伝承されてきたのか分かっていませんが、伝承度の強さからいってかなり以前から伝承されてきていることは間違いないと考えられます。本来なら肥前国風土記の中に少しは出てきてもおかしくないと思うのですが、こうした点も含めて、いつ頃からどのような形で佐賀の地に巨人伝説が根を下ろしていったか、謎は残ります。

ウ 大楠伝説

佐賀県には楠の巨木が多いようです。環境省が平成元年に調査したデータから見ても、全国の第3位に武雄市川古の大楠、第5位に武雄神社(御船山麓)の大楠と、上位5位以内に2つも並びます。

この楠の巨木に関し、8世紀前半に編纂されたという「肥前国風土記」には、肥前国の中心地である佐賀の郡に楠の巨木があり、朝日の陰は杵島郡(現在の白石町)、夕日の陰は養父郡(現在の鳥栖市近く)まで届いたという話が載っています。楠の木がこれほど栄えていたことから、「さが」という地名の由来の一つにもなったとされる話です。

肥前風土記のこの話の影響かどうか分かりませんが、肥前国の国府があった大和町で、楠の巨木の話がよく聞かれます。昭和57年から58年にかけて実施した大和町での昔話採集の際、10話程度と同じ内容の巨大な楠の話が採集されています。

具体的には、次のような話です。

「淀姫さんの楠と鎮西八郎為朝」(原文のまま)

今の淀姫神社の境内の西の方に、燃えてしまった楠の木の太(ふ)一とか株のあつですもんね。その楠の木の枝が、大昔、嘉瀬川の反対側の都渡城(ととぎ)の辺(にき)までかかっとったそうです。そいぎ、あの鎮西八郎為朝が、下の石井樋の近くば通りよって、そこから見たぎ、大蛇のごと見えたて。そいで、「大蛇の川ば渡いよっ」ちゅうて、石井樋ん辺から弓で射ったとか言う話のあつ。そがんと太かつたて。

～未刊資料、筆者聞き起こし～

この話に出てくる淀姫神社(正式には「與止日女神社」)は、嘉瀬川が佐賀平野に流れ出す扇状地の根元に位置し、肥前国庁とのつながりが指摘されている古社です。大楠は、この神社の境内の西側、鍋島初代藩主

勝茂が築かせたとされる石垣の上であり、現在は枯れて古株を残すのみとなっています。

この話がいつ頃から伝承されてきたのか、風土記にみえる巨木伝承とどのような関係があるのかなど、興味は尽きません。

エ その他

○ 「脊振山の石楠花」(No. 53)

脊振山の頂上付近にある石楠花は弁財天さんが英彦山(福岡県)から盗んできたとする話です。弁財天さんや英彦山の権現さんも登場することから、かつてこの地で盛んだった山岳信仰を背景に伝承されてきた話だと思われます。

○ 「弘法大師とえつの魚」(No. 32)

筑後川にしか生息していないエツという魚は、漁師の生活の足しにするよう弘法大師が笹の葉を流したものであるとする話です。全国に数多くある弘法大師の貴種流離譚(きしゅりゅうりたん、偉い人がやってきて富をもたらす話)のひとつです。

○ 「おとわ観音由来(大歳の火)」(No. 16)

大晦日の晩に火を消してしまった女中さんに不思議なことが起きて富を授かるという話です。「大歳の客」という話型に属し、本来なら本格昔話ですが、この話のように地元根付いたものもあり、昔話が伝説化していった一つの例として見ることができます。

○ 「和泉式部と足袋の始まり」(No. 5)

平安時代の宮廷歌人である和泉式部は、杵島山麓のお寺に捨てられていた鹿の子供であるとする話で、鹿の子だということを隠すため、足袋が生まれたとする由来話が付いています。全国にある和泉式部伝説の一つですが、舞台となったお寺も実在しており、しっかり地元根付いています。

○ 「杵島山の松の精と三弦弾きの娘」(No. 27)

六角川にかかっている杵島郡白石町の馬田橋は、杵島山の松の精と三弦弾きの娘との悲恋の末にできたものであるとする話です。

なお、杵島山麓周辺は、本格的な語り手である蒲原さんの出身地であることもあり、昔話にしろ伝説にしろ、内容が豊かな話が数多くみられます。

○ 「炭焼き長者(住友由来)」(No. 51)

厳木町(唐津市)の炭焼きが都から嫁をもらったことで炭焼き窯の中に黄金があることに気づき金持ちになる話です。

全国的な「炭焼き長者」の話ですが、地名伝説にもなっており、しっかり地元根付いています。

7 県内で伝承される話の背景（語りの形式、語り手等）

(1) 語りの形式

昔話は、その性格から語りの形式を重視します。

語りの形式とは、具体的には、語り始め、語り納めなどのことです。

ア 語り始め

佐賀における昔話の語り始めは、一般的に、「むかし、むかし」とされています。中には、「むかし、むかし、うー（大）むかし」、「くー（大）むかし」等強調した表現もみられますが、一般化はしていません。

ただ、現実には、蒲原タツエさんのような本格的な語り手でさえも、語り始めを付けないことが多いことからみると、必ずしも付ける必要はなかったし、付けなくても昔話は語る事が許されたようです。

イ 語り納め

佐賀における昔話の語り納めは、一般的に、「そいばっきゃ」とされていますが、細かく見ると、地域により、あるいは語り手により、次のような違いが見られます。

○ 違い1（県内での違い）

県北部の唐津市周辺部や県東部の鳥栖市田代地区・基山町一帯では、「そいばっかり」、「そりばっかり」などと、語尾が微妙に変化しているものがあります。

これは、両地区が、江戸時代、鍋島藩ではなく、他藩に属していた影響と言われ、同じ佐賀弁でも方言が微妙に異なるからです。

ちなみに、県北部は、徳川の譜代大名が治める唐津藩で同じ佐賀方言でも唐津方言として区別します。また、県東部の鳥栖市田代地区・基山町一帯は対馬藩（宗氏）の所領で、田代方言として区別します。

○ 違い2（「そいばっきゃ」と「そいまっきゃ」）

「そいばっきゃ」を使う鍋島藩の領域内でも、微妙な変化があります。小城市以西では、「そいばっきゃ」と同様に、「そいまっきゃ」もよく使われます。

これは、「そいまっきゃ」が「そいばっきゃ」よりも発音しやすいことから変化したのではないかとされています。

なお、嬉野市には、1話だけですが、「昔むくれて、今まあっきゃあ」とする語り納めも確認されています。

○ 違い3（「ちゃん、ちゃん」という語り納め）

もうひとつ、「ちゃん、ちゃん」という語り納めがあります。特に、佐賀の本格的な語り手の一人の松尾テイさんの語りの中に頻繁に出てきます。本シリーズで取り上げた11話のうち10話に「ちゃん、ちゃん」の語り納めが付いています。具体的には、「これでおしまい、ちゃん、ちゃん」という風に語られているようです。

不思議なことに、この語り納めは、もう一人の佐賀の本格的な語り手、蒲原タツエさんの話の中にもでてきます。ほとんどは「そいばっきゃ」ですが、本シリーズで取り上げた15話のうち1話が「ちゃん、ちゃん」で終わる話です。蒲原さんが語った843話のなかには、もっとたくさん「ちゃん、ちゃん」で

終わる話があります。

さらに不思議なのは、この「ちゃん、ちゃん」という語り納めをする語り手は、県内ではお二人だけだということです。

では、お二人のこの「ちゃん、ちゃん」という語り納めはどこから来たのか。

松尾さんの話にはほとんど出てくるので、松尾さんが昔話を聞いた前傳承者が使っていた語り納めと考えられます。蒲原さんによると、「ちゃん、ちゃん」が付く話は叔母さんにあたる人から聞いたとのことなので、その叔母さんと松尾さんの前傳承者はどこか繋がるのかなど、謎は深まるばかりです。

ウ その他

語りには、そろそろ語りを終わりにする際に話される話があります。広義では語りの形式の一つに含まれますので、ここで2話紹介します。

ともに、子供に話をせがんで寝ようとしないうちなどに、語りを終わらせるためにする話です。

「葉のない大根」(原話のまま)

百姓さんが大根ばつくりましげな。

そうしたげなりゃあ、そん大根が、ドンドンドンドン大きゅうなって、もう、見たこともなかごと大きな大根になりましたげなけん、

「こりゃあ、もう珍しかけん、お殿さんに上ぎゅう」ちゅうて、大八車に乗せて、お城に持って行きましたげな。

そうしたげな、あんまい大きかけんて、門から入りませんげなけん、「葉ば切ったなら入ろう」ちゅうて、葉ばきりましたげな。

そうしたら、そいが、本当に、は・な・しになつたげなちゅうて。

～基山の民話(昭和61年、佐賀民話の会編集・発行)より～

「長一んか話(天からふんどし)」(原話のまま)

あたいのお母さんなさい、朝早う起きてお茶がゆば炊きなんもんじゃさい、お父さんのあたいば寝せようて、「もう寝一らんば、長(な)一んか話ばきかすつよ」ちゅうてね、「ないねー」ちゅうたぎ、「天から禪(へこ)ふったった」ちゅうて言われよった。

～未刊資料(東与賀町)、筆者聞き起こし～

(2) 語り手

佐賀の昔話の語り手と言え、まず、843話の昔話を語った塩田町の蒲原タツエさんと、同じく300話近くの昔話の傳承者である伊万里市立花町の松尾テイさんを紹介しないわけにはいきません。

実は、このお二人には、ある共通点がみられます。

まず、生年月日が1カ月と違わないのです。蒲原さんが大正5年4月13日生まれに対し、松尾さんは同じく大正5年3月29日生まれです。

さらに、蒲原さんの嫁ぎ先である塩田町(現嬉野市塩田町)は、松尾さんの嫁ぐ前の郷里(出生地)なの

です。

また、蒲原さんの実家かというと、塩田川を暫く下った目と鼻の先の旧有明町(現白石町)です。そして、この地も塩田町も杵島山麓の南の端に当たり、距離的にはそれ程離れていません。

こうした共通点は、偶然の一致だろうと思いますが、何か不思議なものを感じます。そして、先程の語りの形式のところで触れた、蒲原さんと松尾さんだけにしかみられない語り納め「チャン、チャン」の一致は、塩田町あたりで謎の解明の糸口が見えてくるような気がしています。

(3) 語りの場所

語り手が親や祖父母で、聞き手が子供や孫の場合、昔話が語られた場所は、佐賀県も他県と同じく寝床や囲炉裏端などが主な場所ですが、実際には、もっと色々な場所で語られていたようです。

語りの場所が話の名前になった例を、2つ紹介します。

ア 絵描き座話

佐賀県の伝統産業である有田焼が作られる過程のうち、絵付けの場で話されていた話のことです。

本シリーズでは、「絵描き座話(一杯飲まんば話されん)」(No. 12)をとりあげました。

この話は頓智話ですが、大半が笑い話で、その中でも、色話が多かったようです。語り手によると、絵付けの場には女性もいたことから、女性を冷やかす目的もあったということです。

イ 柿むき話

佐賀市大和町の松梅地区において、柿の皮をむく作業の場で話されていた話です。

大和町の松梅地区では、毎年暮れになると、田の中の稲小積や家の軒先に正月用の干し柿が沢山吊るされている風情をよく見かけます。

この柿の皮をむく作業は、以前は家族総出で、夜なべ仕事でやっていたということです。具体的には、家の土間にござを敷き、ござの中央に置いた柿の山の周りに、家族や近隣の親族まで集まって、夜中まで柿むき作業をやっていたそうです。

夕食後の時間ですし、昼間の仕事疲れなどもあり、皆眠くなるわけですが、その眠気を防ぐために昔話が話されていたと思われます。

このため、話のうまい語り手は重宝がられて、方々から呼ばれることも多かったそうで、こうした語り手は、話を沢山仕入れるため、他の地域まで話を聞きに出かけたり、旅の座頭などがやってくると、泊まっている宿に自ら話を聞きに行っていたとのこと。

本シリーズでは、「にわか侍」(No. 68)を取り上げましたが、この他にも次のような、話があります。

「ヤンボシ(山伏)さんとヤコ(野狐)」(原話のまま)

むかあし、ヤンボシさんがそま(蕎麦)畑を通いよんさったぎ、ヤコがそこに昼寝をしとったそうです。

そいけん、ヤンボシさんが、いっちょ(ひとつ)びっくいさせてやろうで思うて、ヤコの耳に法螺貝を持っていて、一生懸命、ひどう鳴りやあたそうです。

そいぎと、ヤコがびっくいして、ケンケンケンで逃げていったて。

そいぎ、そんな時あ、ヤンボシさんが勝ったばってんが、次にまた、その田舎道を通いよったところが、日の暮れ方になって、前から葬式の行列の来よったて。

そいぎ、「こりゃあ、葬式の通っ。縁起の悪か」て言うて、木の上い登って通い過ぎつとば待つとらしたわけ。

ところが、その葬式がこともあろうに、ヤンボシさんの登つとらすとこ(所)の木やしちやあ(下)棺桶ば埋めたからですね、葬式の行列の帰った後で、棺桶ん中から、生焼けした死体が出てきて、木の登ってきたて。

そいぎ、ヤンボシさんな、もうどかんしゅうもなし(どうしようもなく)、ちょうど反対側が川じやったから、「英彦山権現さんのおいとまごい」ちゅうて、その木の上から川に飛び降りたて。

そいぎ、川ん中て思つとつたら、そこは蕎麦畑じやったて。

そいで、ばあつきや

～未刊資料、筆者聞き起こし～

話の種類は、眠気覚ましが目的なので、本シリーズのNo. 68 やこの話のように、面白い話や怖い話が多かったそうです。

このほか、作業の場で昔話が語られていた例としては、その技術が県の重要無形文化財に指定されている名尾和紙(佐賀市大和町)の紙漉きの場で話を聞いたとか、素麺づくりの麺を伸ばす作業の場(佐賀市諸富町)で話を聞いたとするものもあり、地域や語り手等に応じて、色々な語りの場があったようです。

8 その他

(1) 面白い話、可哀そうな話などの区分

本シリーズの話を、図書館や公民館などの読み聞かせや語り聞かせなどに活用する方もおられると思います。

その際、どういう話を選んでいいか迷われることもあると思いますので、ここでは、本シリーズから、「面白い話」、「可哀想な話」などの区分で代表的な話を取り上げてみました。

ア 面白い話

面白い話といったら、昔から一番人気なのが、屁を主題とした話のようです。屁で人を吹き飛ばすとか屁で雁を落とすとか、屁の特技も多種多様です。

本シリーズでは、「屁の仇は屁で討つ」(No. 82)、「屁ふり嫁さんの雁落とし」(No. 83)、「ポンポコリンの屁(屁ひり爺)」(No. 85)などがその話ですが、特に No. 83 は全国的に人気があり、屁の話の代表格と言えるものです。

イ 可哀想な話

可哀想な話の代表的なものは、継子話の「父さん恋しやチンチロリン(継子と尺八)」(No. 63) だと思います。

他の継子話は継子が最後には幸せになるものがほとんどですが、この話だけは、継子が殺されてしまいます。そして、尺八の音色を借りて、自分が死んだことを父に伝えるという話ですが、尺八の音色と共に、語り手、聞き手の共感を呼び、継子話の中でも一番人気の話です。

また、異類婚姻譚の中でも異類との悲恋物語も、可哀想な話に入ると思います。例えば、「月見草の花嫁」(No. 59) や「杵島山の松の精と三弦弾きの娘」(No. 27) などはその典型的なものです。

ウ 怖い話

怖い話も、特に子供には人気のある話です。

この話の代表的なものが、「蕎麦の根の赤い由来(神様の金の鎖)」(No. 55) です。山姥の怖さが良く出ている話で、県内でも山間部を中心に広範囲に伝承されています。語り手によると、山姥が登場する話は、「やまんば話」と呼ばれて、子供達の間で人気があったそうです。

もうひとつあげると、「飯を食べん嫁さん(五月五日の菖蒲由来)」(No. 91) も怖い話です。特に、嫁さんの頭の口に飯を投げ込む場面は、怖いイメージとして定着しているように思われます。

エ 不思議な話

「弘法大師とえつの魚」(No. 32)、「おとわ観音由来(大歳の火)」(No. 16)、「貧乏神と福の神」(No. 大歳の客)などが該当すると思います。特に、後者の2話は「大晦日の晩には不思議なことが起こるものだ」という考えが日本人の根底にある話だと言われています。

オ ほのぼのとした話

最後に、私の好みも入りますが、次のような話は本シリーズの中でも綺麗な話で、これからも語り伝えて行ってほしい話です。

- 「餅つきにきた堤の主 (大蛇の餅つき)」(No. 94) ※ほのぼのとした話
- 「貝の恩返し (貝姫)」(No. 18) ※異類婚姻譚の中でも綺麗な話
- 「猫と和尚さん (猫の恩返し)」(No. 69) ※動物報恩譚の中でも綺麗な話

(2) 参考文献

最後に、昔話についてもっと知りたい、という人のために、私のお勧めの文献等を少し紹介させていただきます。

(昔話の入門書)

- 「昔話は生きている」(平成8年、稲田浩二著、筑摩書房発行)
昭和の時代に生きていた昔話、語り手の実像を、筆者の体験を通して分かりやすく解説したものです。すぐれた語り手との出会い、昔話についての新しい発見など、研究者としての驚きや感動も交え、昔話がどういうところでどのようにして伝承されてきたのか、昔話の生命とは何か等、昔話の本質が分かりやすく解説されています。
- 「改訂 昔話とは何か」(平成21年、小沢俊夫著・発行)
グリム童話の第一人者、小沢俊夫氏が、ヨーロッパの昔話との比較を通じて日本昔話の文芸的特質やヨーロッパと違った日本の昔話の価値観等を考察し、昔話の現代的意義を問うものです。

その他、次の本も、昔話の基礎を勉強するのにお勧めです。

- 「日本昔話ハンドブック」(平成13年、稲田浩二・稲田和子編、三省堂発行)
- 「世界昔話ハンドブック」(平成16年、編者代表：稲田浩二編、三省堂発行)

(全国の昔話集)

- 「日本昔話百選」(昭和46年、稲田浩二・稲田和子著、三省堂発行)
全国の昔話から選び抜かれた話100話を解説付きで紹介しています。著者によると、「昔話は生きている」の姉妹本とされています。

(佐賀県の昔話資料)

- 「日本昔話通観 第23巻 福岡・佐賀・大分」(昭和55年、稲田浩二・小沢俊夫責任編集、同朋舎発行)
日本全国(北海道のアイヌ民俗から沖縄)の昔話文献等を集大成したシリーズ本の北部九州版です。この中に、昭和50年頃までに佐賀県内で採集された昔話が多数掲載されています。
- 前述2-(1)に記した調査資料集(200話以上の話が掲載されている調査誌)

(佐賀県の昔話についての考察等)

- 「肥前口承文芸考」(平成11年発行、宮地武彦著・発行)

故宮地武彦先生が平成10年頃までに発表された論考等を集めたものです。宮地先生による佐賀県の昔話についての研究論文等が収められており、特に、「肥前の笑い」と題された佐賀県の笑話に対する論考は秀逸です。

○ 「宮地武彦先生追悼集」(平成28年発行、宮地武彦先生追悼集編纂委員会編集・発行)

第三章に、佐賀県の代表的な語り手の話が載った「蒲原タツエ唄の語る843話」(平成18年、宮地武彦著、三弥井書店)や「肥前伊万里の昔話と伝説(昔話研究資料叢書別巻)」(昭和61年、宮地武彦著、三弥井書店発行)の解説が掲載されている他、宮地先生の学士論文等の解説も掲載されています。また、佐賀県を代表する昔話20話を選定し、原話を解説付きで載せています。